プルーストの詩学

櫻木泰行

プルーストの詩學

江苏工业学院图书馆
藏书章

櫻木泰行

慶應義塾大學
法學研究會刊

櫻木泰行（さくらぎ　やすゆき）

1932年三重県四日市市生まれ。南山大学文学部仏語学仏文学科卒（1958年）、慶應義塾大学文学修士（1960年）、同大学院文学研究科博士課程修了（1963年）、20世紀フランス文学専攻、同大学法学部教授（1976年）。現在慶應義塾大学名誉教授、同法学部非常勤講師。

編著書に『フランス語　IV』（共編）（私立大学通信教育協会、1977年）、『新・フランス語　第四部』（共編）（慶應通信、1995年）などかある。

プルーストの詩学　　慶應義塾大学法学研究会叢書　別冊

1999年12月20日　発行

定価9,450円
（本体9,000円）
送料400円

著　者　© 櫻　木　泰　行

発行者　東京都港区三田2丁目15-45
慶應義塾大学法学研究会

印刷者　株式会社　太平印刷社

発売所　東京都港区三田2丁目19-30
慶應義塾大学出版会株式会社
電話 03-3451-3584　Fax 03-3451-3122

落丁・乱丁本はお取替いたします。

ISBN4-7664-0683-4

はじめに

見るという行為は必ずしも容易ではない。むしろむづかしいかもしれない。この世界にはさまざまの美しいものがあり、ひとはその美しいものにひかれるのだが、いつもそれをよく見るとはかぎらず、いつも見えるわけでもない。人間にあたえられた視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、温暖冷寒感覚のうち、視覚は別格の座を認められているはずだが、どこまで信頼をおけるのか。喜怒哀楽を知る者の想像力と記憶の波動が見ることのうちにはある。人間はそのような存在として世界とかかわる。

『失われた時を求めて』の小説家マルセル・プルーストは、人間現実の本質を占める恋愛を、音楽、美術、文学などに最も近い重要性をもつものと考えた。なぜなら時間的空間的存在である人間にとって、恋愛は、見ること、知ることへの欲望を最も鋭敏にし、自己と他者の世界に深く目を向けさせるからだ。あるいは、恋愛は、ほとんどすぐれた小説作品や芸術作品と同じように存在の時間性と永遠性を意識あるいは夢想させ、ある無限の想像的空間を生み出すからだ。「囚われの女」のなかでプルーストは書いている。「恋愛とは、心に感じられるようになった時間と空間である。」L'amour, c'est l'espace et le temps rendus sensibles au cœur. (III (Pr), 385) 恋する者は、しかし相手の内面の不可視性、存在の不透明性に悩み、「魂と魂の相互滲透」l'interpénétration des âmes (*ibid.*, 387) を夢見ながらその困難に苦しむだろう。

この小説家は自らの作品の中心に恋愛と芸術の主題をすえた。本書の関心も、したがって直接、間接にそれにかか

わっている。

プルーストの小説にきわだって特徴的なのは、現実を主体との関係において時間・空間の相のもとにとらえようとしたことであろう。プルースト的世界にあっては物たちでさえひそかな時間的厚みをもって現れる。それは見る者の心の反映なのかもしれないが、ある交感状態の生起ともみなされよう。たとえば、これは本論ではふれていないが、主人公の「私」が初めて母と離れ、祖母といっしょにバルベックに向う列車のなかで目にする座席の窓の「青い日よけ（ブラインド）」le store bleu（I (JF), 652）もその一例である。「日よけ」も「青」もコンブレーの世界と暗黙のうちに結ばれるであろうし、青い色は『失われた時』の全篇を見え隠れしながら流れる主要モチーフの一つとしてプルーストの世界に刻まれるであろう。

本書は一九六〇年代から八〇年代にかけて発表したプルーストの小説に関する論考を集めたものである。プルースト自身は古典文学への深い理解をもつと同時に自らが生きた時代の新しい潮流にもきわめて敏感で、それを自らの人生の体験とともに作品のなかに豊かに生かした作家である。本書では、しかし、各論の関心はややもすれば個人的な好みにひかされ、あるいは独自性にたいする願望から未開拓の領域に照明をあてることを望むあまり、その範囲がかなり限定されたものになったことは否めない。

表題を「プルーストの詩学」とした。ここで詩学とはラテン語のポエティカ poetica、フランス語のポエティック poétique のつもりであるが、本書は最初から体系的に構築された一書ではない。むしろほとんどすべてが未完成の論考であり、したがって正確には「プルーストの詩学の試み」あるいは「プルーストの詩学のために」とでもすべきものであろう。刊行にあたっては一部に若干の加筆と修正を加えた。長年月にまたがる執筆ゆえの不統一も組み替えを含めある程度まで統一したが、あえてそれ以上の改稿はせず、重複部分もそのまま残した。不統一のままの典型的な一例としては、イマージュとイメージの両用がある。文体あるいはリズムの関係で初稿の感覚を尊重した。また、色彩語の頻度調査で黒 noir などの調査洩れがあとで見つかり、パーセンテージで示した頻度の数値を再計算する必

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

要があったが、もともと少数点二桁まで出して四捨五入した数値であり、今回、微小な調整のために煩雑な作業をやりなおすことはしなかった。許容される範囲の誤差であろうと思う。他にも不備がないわけではないがそれをも含めて全篇を一つの記録として残しておきたい気持ちがあり、あえて発表当初の姿を守り、ほとんど復刻版のような形で刊行することにした。同じ理由から『失われた時を求めて』のテクストもプレイヤッド新版全四巻（一九八七―九年）によらず、旧版全三巻（一九五四年）のままとした。新版との比較・検索が必要なときは、新版の各巻末尾に記載されている両版の頁数照合一覧を利用することで目的は達せられるであろう。

凡　例

一、『失われた時を求めて』の引用はすべてプレイヤッド版全三巻（一九五四年）によっている。文中では巻数、篇名略号、頁数のみを（I (Sw), 355）のように示した。後注では、I (Sw), p. 406. とした。

テクスト、および略号は以下の通りである。

Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, édition établie par Pierre Clarac avec la collaboration d'Yves Sandre, Bibliothèque de la Pléiade, 3 volumes, Gallimard, 1954.

I (Sw) ……第一巻　第一篇　Du côté de chez Swann「スワン家の方へ」
I (JF) ……　同　第二篇　A l'ombre des jeunes filles en fleurs「花咲く乙女たちの陰に」
II (Gu) ……第二巻　第三篇　Le Coté de Guermantes「ゲルマントの方」
II (SG) ……　同　第四篇　Sodome et Gomorrhe「ソドムとゴモラ」
III (Pr) ……第三巻　第五篇　La Prisonnière「囚われの女」
III (Fu) ……　同　第六篇　La Fugitive「逃げ去る女」
III (TR) ……　同　第七篇　Le Temps retrouvé「見出された時」

一、他に、適宜、次の略号も用いた。

JS ……*Jean Santeuil*——ただし、ファロワ版全三巻（一九五二年）との混同を避けるときはプレイヤッド版（一九七一年）を *JS* (Pléiade) のように示した。
CSB ……*Contre Sainte-Beuve*——ファロワ版（一九五四年）とプレイヤッド版（一九七一年）の区別が必要なときは、*CSB* (Fallois)、*CSB* (Pléiade) とした。
CG I, II, III ……*Correspondance générale de Marcel Proust*, I, II, III, Plon, 1931-2.

目　次

はじめに

第一章　プルーストの愛における所有の観念について……3

第二章　プルーストと時間の問題……19
I　時間における連続性と不連続性
II　プルースト的時間の素描と探求の方向

第三章　プルーストにおける詩的現象学……29

第四章　プルーストの方法……47
——その色彩光学をめぐって——

第五章　プルーストと色彩……107
——《atre》系の色彩語をめぐって——

第六章　文学と色彩……129
——プルーストと《mauve》——

第七章　プルーストと「青」のイマージュ……173

第八章　透明の詩学……215
——プルーストと「ガラス」のイマージュ——
I
1　「砕けたガラス器」
2　「ビロードの外套」
3　「砕かれた声」
II
『楽しみと日々』
1　〈脆さ〉と〈粉砕〉のモチーフ
2　〈流動性〉または〈溶解〉のモチーフ
(1)　光と液体のイマージュ
(2)　溶解のイマージュ
III
『楽しみと日々』から『ジャン・サントゥイユ』へ
存在の脆さ——「脆い玩具」jouet fragile
IV
1　「砕かれた香水びん」flacons brisés——裏切られた願望
2　『ジャン・サントゥイユ』における《briser》のモチーフ
V
『ジャン・サントゥイユ』における《briser》のモチーフの変奏
(1)　砕けた意志 la volonté brisée
(2)　砕けた水差し la carafe brisée

第九章　プルーストと砕けたガラス器……295
—Pour une poétique de transparence (1)—
I
II
1　オデットが砕いたvase
2　砕かれたヴェネツィアのガラス器
3　押しつぶされたビロードの溶解
4　破壊できない結合
5　一つの解釈の可能性
6　第二の解釈
III
1　砕けたガラス器を求めて
(1)　オデットの「花瓶」vase
(2)　レオニー叔母の花瓶
(3)　アルベルチーヌの隠語
2　三つの破片
(1)　ヴィルパリジス夫人のvase
(2)　二国間のalliance
(3)　永久に破壊されたvase
3　不在のvaseの喚起
IV
不滅のunionへの祈り

第十章　プルースト・一九〇四年と一九〇五年　あるいは「巨匠たちのワニス」……349
—Pour une poétique de transparence (2)—
I
1　幻想の空間
2　一九〇五年——母の死
II　流動的なもの
III　透明な「ワニス」
第十一章　プルースト素描—付加と縮約……369
—Pour une poétique de transparence (3)—
I　「煮凍り」のように
II　ガラス・水・光
III　縮約法
IV　「光の滴」——イメージのエコー——
第十二章　プルーストと結氷の主題（前）……387
—Pour une poétique de transparence (4)—
I　「脆さ」または「破壊」の主題の二重性
II　唯一の「書物」と準備としてのテクスト
III　詩人の死か？
IV　作品と死の意識

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

第十三章　プルーストと結氷の主題（後）……409
—Pour une poétique de transparence (5)—
I　「脆さ」からの脱出
II　文学的才能の欠如の観念
III　『サント＝ブーヴに反して』に含まれる原図
IV　夕闇の詩学
第十四章　プルースト・透明のイメージ……453
—Pour une poétique de transparence (6)—
第十五章　プルーストの「黒」のイメージ……525
第十六章　プルースト植物誌ノート……545
——プルーストの花——
あとがき
初出一覧

プルーストの詩学

第一章　プルーストの愛における所有の観念について

プルーストの小説『失われた時を求めて』において提示された複雑な相貌を呈する恋愛、とりわけ話者であり主人公である「私」Je のアルベルチーヌ Albertine にたいする恋愛にあって、その展開の図式は、欲望から苦悩に満ちた不安への推移、次いで苦悩とその鎮静との間歇的な *intermittent* 交替運動の反復という形に還元しうるのであるが、[1] その根底に見られるのは、ほとんどつねに、愛の対象の所有という癒し難い欲求である。[2]

L'amour, dans l'anxiété douloureuse comme dans le désir heureux, est *l'exigence d'un tout*. Il ne naît, il ne subsiste que si une partie reste à conquérir. *On n'aime que ce qu'on ne possède pas tout entier*.[3]

所有してはいないものを欲すること、しかもすべてを欲すること。したがってプルースト的恋愛の根幹をなすものは、愛の対象を、その全体性において所有しようとする欲求である。

プルーストの小説にあって、このような欲求を生ぜしめるのは、何よりもまず、われわれの心にとまった女性の生活、《la vie particulière où elle baigne》[4] であり、つまりは、その女性の属しているわれわれにとっては未知の世界で

ある。そこからして、われわれはまず、われわれの眼にさまざまに変貌しながら映るこの女性の実体を知ろうと努めるのである。ところが、他者は、われわれの内部においてわれわれの想像力の所産を限りなく付加された《un développement en nous》をもつと同時に、《un autre hors de nous》、すなわち他者自身の時間と空間をもつのであり、しかもこの二つの「発展」は相互に「反作用し合う」[5]がゆえに、絶えず変貌する女の実体を明確に知りつくすためには、われわれはその女を不動のものとし、固定しなければならない。[6]

しかるに、プルーストによれば、人間存在は不断に継起する無数の自我の「積み重ね」superposition[7]ないし連続であり、しかもそれは《une suite de moi juxtaposés mais distincts qui mourraient les uns après les autres ou même alterneraient entre eux, ……》[8]である。そうであるとすれば、かかる継起としてのかぎりにおける持続存在としての愛の対象を、これと同じように不断の変移・変容を余儀なくされている時間的存在としての「私」が、一つの時間空間のうちに固定しようとすることは決定的に不可能でなければならない。しかも、この不可能事がもし可能になるとすれば恋愛は消滅せねばならぬ。なぜなら、プルースト的恋愛にあっては、愛は、未知なるもの、近づき難いもの、われわれの所有してはいないものに向かうのであり、[9]まさにこれら知的所有の不可実現性こそが、さらにまた、かかる所有の実現を脅かされ、その不可能性を痛感させられることから生ずる不安や苦悩こそが、愛の絶えざる動因であると同時に、愛の存続理由だからである。かくて、プルースト的恋愛は、平行する二者の時間性、空間性の相克であり、その出発点から、自己矛盾、すなわち愛を必然的に挫折せしめる永久的病根を内有しているのである。[10]

所有の欲求としての愛には、愛の対象の実体を全的に知ろうとする欲求と同時に、その対象をわがものにできぬのではあるまいかという不安、あるいは、愛の対象を失いはせぬかという恐れがつきまとう。かくて次の段階では、われわれは愛する対象を一層確実に、余すところなく占有しようと努めるのである。そして、ここで露わになるのは、愛する女にたいするいわば知的欲求であるどころか、《un besoin douloureux de la *maîtriser* entièrement dans les moindres parties de son cœur》[11]というさらに根底的な欲求である。

したがって奇妙なことに――なぜならこれは矛盾した志向であるからだが――愛する女を全的に所有しようとすることは、まず、われわれにとって未知な、捉え難く思われる彼女の全生活を、そのわれわれにとって未知であるがゆえに生ずる魅力[12]を害うことなしに可知的なもの、明白なものにすると同時に、その女の全時間空間をわれわれのうちに吸収しようとすることである。このことを逆にいいかえるならば、例えば《…… Albertine provoque constamment le désir du narrateur de tout connaître, et de lui dérober sa liberté》[13]となるであろう。

かくて、プルーストにおける所有の欲求としての愛は、一方ではいわば愛する対象の内的現実の知的所有の欲求として現れると同時に、他方では愛の対象の内的、外的自由性を剝奪せんとする欲求として現れる。

しかしながら、かかる欲求の対象は、不動ではあらぬ人間存在であり、さらにまた、かかる欲求は本来的に相手をいわば対象化し、事物化しようとする態度を避けえない。そこからして、かかる所有の欲求は必然的にわれわれとわれわれの愛の対象とのあいだに一種の越え難い距離を出現せしめずにはおかない[14]。すなわち、恋をする者としてのわれわれの内部には、《ces affreuses distances intérieures au terme desquelles une femme que nous aimons nous apparaît si lointaine》[15]の意識が絶えず存在するのである。したがって所有の欲求としての愛を実現するためには、この「恐ろしい内的距離」が超克されねばならない。さらにまた、所有の完全化を脅かされるがゆえに、この女が、われわれとは別の男あるいは女と関係を結ぶことを恐れねばならず、したがって女が誘惑に身をさらす可能性を破壊せねばならない。かくて、例えば話者マルセルは、同性愛の好みをもつアルベルチーヌをほとんど監禁状態に置き、彼女と同棲生活、むしろ《vie de retraite》に入るのである。すなわち話者は、《ces grandes lignes qui délimitaient mon existence et à l'intérieur desquelles ne pouvait pénétrer personne excépté Albertine ……》[16]の内側で生き、そこからして、アルベルチーヌの自由を奪おうとした彼自身も囚われの身となるのである。

プルースト的恋愛における所有とは、したがって何よりもまず、われわれと、われわれの愛の対象ないし欲求の対象との内的距離の超克、およびこの対象の自由の破壊を意味する。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com